

かなめ流通G ホットライン

第1回

ウェットクリーニング

ウェットの由来と現状

昔は水洗いしかなかったが、生産性のいいドライが出て、本来水洗いできるようなものもドライするように。



それから「ウェット」・「抜きもの」という言葉が出始めた。大手がメニューを作ったことによりさらに定着。今では、「汗抜き=ウェット」という認識が強くなっている。



一般消費者からしたら、「汗抜き」は何か特殊なことをしてくれている感覚。でも少し知識をつけて「汗抜きは結局は水洗い」となったら、クリーニングの価値がなくなってしまうのではないかな？

かなめ流通グループでは毎号編集会議の前に各機材商が持ち寄った情報を交換していますが、そんなかなめの特長を生かした独自の企画を立ち上げようということで、「かなめ流通グループ ホットライン」なる企画を立ち上げました。これは、毎回テーマを決め、それについて各々情報を持ち寄って討論を行い、その内容を皆様にもお伝えし、今後の経営につなげてもらおう、またクリーニングについてもっと考えてもらおうとの思いから立ち上げた企画です。
記念すべき第1回は、「ウェットクリーニング」をテーマとし、今話題のニンジャウェットの話も含め、ウェットの売り方、またウェットの在り方など、多岐にわたって話し合いが行われました。

今の家庭洗濯事情

某K社の家庭用洗剤のドライ用洗剤の体験レポートでは…

- ・クリーニングに出す以外方法がないと思っていた衣料が洗えて家計が大助かり
- ・香りもよく、型崩れもしない
- ・クリーニングに出さず手洗いすることが増えました



しかし、汚れは落ちてもしっかり洗えていない。それを訴えるべきではないか。

臭いがとれた=清潔!?

消費者は消臭剤を利用して「臭いがとれた=清潔になった」という感覚がある。しかし実際には汚れは残っているし、消臭剤に含まれる酸と汗の成分が混ざってどんどん服が硬化していく。



消臭剤を敵に回すのではなく、「消臭剤をかけたあとは汗抜きクリーニングをしてください」と伝えていくことで取り込める商品は多いのではないかな。

ク店にしかできない洗い

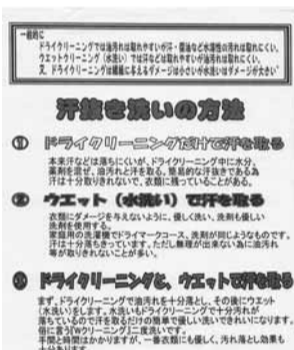
人間から出ているものの多くは汗のような水溶性のものだし、水洗いの方が落ちるのは当たり前。しかし、ウェットは汗には強いが油汚れには弱いという欠点は持っている。



クリーニング店でしかできない洗い方というのは、単なるウェットクリーニングよりもWクリーニングではないかな。



汚れの構造を理解してもらうために、図解などを使ってお客様にWクリーニングの良さを伝える必要がある。



伝えるためには

やはり直接の窓口である受付が伝えていくのが一番いい。

ポスターにするよりもパウチか何かに入れて、カウンターで指を指しながら説明していくのがいいのではないかな。ポスターを貼るにしても、疑問形にするなど、消費者が「これは何？」と聞いてくれるようなポスターにする必要があるのではないかな。



徹底比較!! アクアMCとニンジャウェット



ある勉強会で松井化学のアクアMCと、ツー・エム化成のニンジャウェットの両方を試してもらったところ以下のような意見が。

- 洗浄性はアクアMCの方がいい。
- 防シワ性は明らかにニンジャウェットの方がいい。
- シリコンの風合いなどの加工精度は、アクアMCは柔らかい感じで、ニンジャウェットはハリがある感じ
- アクアMCの方が漂白が作用しやすい。
- ニンジャウェットの方がしっかりコーティングしているのでガード強度は強い。

革を洗っているお客さんにニンジャウェットで洗ってもらったところ、以下のような評価が返ってきた。

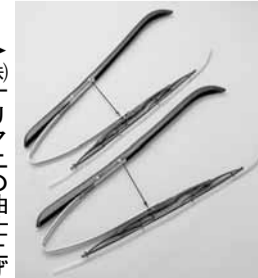
- 革は若干堅くなる
- 品物に傷があるとそこに必要以上に加脂剤が入り込んで色ムラの原因にもなるので注意が必要。
- 毛皮はバラバラになるのを防ぐために漬け込みで洗った方がいい。しかし、風合いに問題はなく、納期が2~3週間かかっていたものが同時進行できるというメリットがある。



かなめ会員のオススメ



「風雅」。(株)ミズホケミカルのウェット用風合い向上剤。風合い改良シリコンを配合し、衣類にヌメリ感と光沢を与え、新品同様の風合いになる。



用ワイパー。上着の袖口や襟元、裾などに効果抜群で、仕上げにも最高だといふ。他にも立体的な仕上げを生み出すピンズリーパーなどがある。

どのように分別するか

洗いでも叩いてもいいもの、ダメなもの。乾燥でも自然乾燥、半乾、全乾でも大丈夫なもの。ではどのように分別するのか。



上下ものならばズボン全乾で、上着は8割くらい乾燥して少し仕上げた後、普通の立体でやったほうが楽になるという仕上げのことを考えた分け方。

全乾することによるリスクが大きいのであれば、そのまま立体で乾かしたほうが安全だという分け方など。

洗いのトラブルよりも乾燥のトラブルの方が多い。タンブラーで熱をかけずに数分回して荒ジワだけをとり、夜中に風乾、次の日の朝仕上げるのが一番安全な気がする。

今後のウェットの在り方

ドライだからクリーニング屋さんでなければできないというものが消費者の感覚の中にあるので、ドライクリーニングの良さをもっと理解してもらう必要がある。

家庭洗濯との区別をはっきりさせるための商品アイテムの一つとして、ウェットクリーニングの存在価値が出てくるのではないのでしょうか。

あくまで家庭洗濯との差別化を分かっていたことが今後のクリーニングの改革になるのではないのでしょうか。



次回:ドライクリーニングについて